メッセージアウトライン
サムエル記第一13:1～23

「サウルの失敗」

[1]「サウルは、ある年齢で王となり、二年間だけイスラエルを治めた」
　別訳では「サウルは三十歳で王となり、十二年間イスラエルの王であった」(新改訳第3版他)と訳されているが、ヘブル語の本文には三十という数詞がない。さらに「十二年間」というのも原文では二年間となっている。しかし、サムエル記の他の記事から考えるとどうみても、サウルの統治期間が短すぎるので妥当な年数として即位の年齢に「三十」を補足し、統治期間の「二年間」も「十」を補足して「十二年間」と訳したと思われる。
[2]「サウルは、自分のためにイスラエルから三千人を選んだ。二千人はサウルとともにミクマスとベテルの山地にいて、千人はヨナタンとともにベニヤミンのギブアにいた。残りの兵は、それぞれ自分の天幕に帰した」
　サウルはイスラエル人の中から三千人を兵士として選び、そのうちの二千人を自分とともにミクマスとベテルの山地に置き、他の千人は息子のヨナタンとともにベニヤミンのギブアに配置した。
「ミクマス」…エルサレムの北約15キロメートルの地。「ベテル」…エルサレムの北約13キロメートルの地。これは11章でサウルがイスラエルの全地から民を招集してアンモン人を打ち破り、その後、ギルガルへ行って正式に王政を樹立した後のことであろう。アンモン人との戦いの時はイスラエル人総出で三十三万人の戦う民がいたが、その後、サウルは残りの者を帰し、自分につく常駐の兵として三千人を選んだのであろう。
[3-4]「ヨナタンは、ゲバにいたペリシテ人の守備隊長を打ち殺した。サウルのほうは国中に角笛を吹き鳴らした。ペリシテ人たちは、だれかが『ヘブル人に思い知らせてやろう』というのを聞いた。全イスラエルは、『サウルがペリシテ人の守備隊長を打ち殺し、しかも、イスラエルがペリシテ人の恨みを買った』ということを聞いた。兵はギルガルでサウルのもとに呼び集められた」
　「ヨナタン」…神の賜物の意。「ゲバ」…ギブアの北東5キロメートルの地と思われる。
　サウルが二十歳の時にヨナタンが生まれていたとしても、その後、ペリシテ人の守備隊長を打ち破るほどの屈強な青年になるにはかなりの年数が必要である。これも 13：1 節の別訳で三十という数詞を補足した一つの根拠である。サウルはこの時、ギルガルに移動しており、そこでイスラエルの兵を招集した。ヨルダン川の西数キロのギルガルはヨシュアに率いられたイスラエルの民がヨルダン川を渡って最初に宿営した地であり、サウルが王と認められ、王政が

樹立された記念すべき地である。またヨルダン川東のギルアデ地方（ガド部族）からの援軍も期待できる。
[5]「ペリシテ人はイスラエル人と戦うために集まった。戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように数多くの兵たちであった。彼らは上って来て、ベテ・アベンの東、ミクマスに陣を敷いた」
　「ベテ・アベン」…空しい者の家の意。ミクマスの西数キロメートルの地と思われる。
ペリシテ人は圧倒的な兵力を率いてミクマスに上って来た。そしてその地に陣を敷いた。
[6]「イスラエルの人々は、自分たちが危険なのを見てとった。兵たちがひどく追いつめられていたからである。兵たちは洞穴や、奥まったところ、岩間、地下室、水溜めの中に隠れた」
　ペリシテ人たちはアンモン人たちより強力でしかもイスラエルの兵は三千人しかいない。そしてその中の多くの者たちは恐れをなして洞穴や地下室などに隠れた。
[7]「あるヘブル人たちはヨルダン川を渡って、ガドの地、すなわちギルアデに行った。しかしサウルはなおギルガルにとどまり、兵たちはみな震えながら彼に従っていた」
兵たちはみな強力なペリシテ人を恐れていた。ヨルダン川を越えてギルアデ方面に逃げる者もいた。残った兵たちは震えながら、かろうじてサウルに従っているという状態であった。
[8-10]「サウルは、サムエルがいることになっている例祭まで、七日間待ったが、サムエルはギルガルに来なかった。それで、兵たちはサウルから離れて散って行こうとした。サウルは『全焼のささげ物と交わりのいけにえを私のところに持って来なさい』と言った。そして全焼のささげ物を献げた。彼が全焼のささげ物を終えたとき、なんとサムエルが来た。サウルは迎えに出て、彼にあいさつした」
「全焼のささげ物」は神への全き献身を表すもので、牛または羊をすべて焼いて献げた。
「交わりのいけにえ」は神と人との間の平和と交わりを表すもので、いけにえの動物の一部を祭壇で焼き、一部は祭司に、一部はささげた者に分け与えられた。本来はこれらのことはあの出エジプトの時代に最初に神によって祭司に任命されたアロンの子孫がそのつとめを果たすべきことであったが、サウルはこれを自ら行ったのである。しかし、そのいけにえを献げ終わったちょうどその時にサムエルがやって来たのである。
[11-12]「サムエルは言った。『あなたは、何ということをしたのか。』サウルは答えた。『兵たちが私から離れて散って行こうとしていて、また、ペリシテ人がミクマスに集まっていたのに、あなたが毎年の例祭に来ていないのを見た

からです。今、ペリシテ人がギルガルにいる私に向かって下って来ようとしているのに、まだ私は主に嘆願していないと考え、あえて、全焼のささげ物を献げたのです。』」

ペリシテ人が今にも攻撃して来ようとしている。サウルはサムエルが来ることになっている例祭の日まで七日間待ったが、サムエルはまだ来ない。兵たちはペリシテ人を恐れ、次々と戦列から離脱していく。そのような切羽詰まった状況の中で、あえてサウルは主に嘆願のために全焼のいけにえを献げたのであった。理屈としてはもっともであり、遅刻したサムエルの方に問題があったのではないかとみることもできるが、機械的、時間的に七日間待って時間切れになればサウル自ら主にいけにえを献げ、戦いのために嘆願できるということではなく、サムエルが言ったのは「私より先にギルガルに下って行きなさい。私も全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げるために、あなたのところへ下って行きます。私があなたのところに着くまで、そこで七日間待たなければなりません。それからあなたがなすべきことを教えます」（10：8）であり、時間的に七日間待ってそれでも来なかったならば、約束は反故になり、何をしてもよいということではなく、サムエルが時間に遅れてもサウルが彼からなすべきことを教えられるまで待つべきだったのである。
それゆえサウルの犯した過ちは、人間的現実の不安と動揺を神への信頼で克服しようとしなかったという点にあったのである。モーセも同様な罪を犯している。→民数記 20：1~13
[13-14]「サムエルはサウルに言った。『愚かなことをしたものだ。あなたは、あなたの神、主が命じた命令を守らなかった。主は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。しかし、今や、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。主があなたに命じられたことを、あなたが守らなかったからだ。』」

サウルは神への信仰によってではなく、人間的手段によって人々の心を自分につなぎとめようとした。それは主が命じたことを守らなかったことであり、愚かな行為であった。イスラエルの指導者、王である者は神のことばに従い、どのような時も神に信頼し、神の力を待ち望むことが大切なのである。サウルが信仰をもってサムエルを待ち続けていれば、彼の王国は堅く立ったであろうに。しかし、それは実現しなくなってしまった。そしてサムエルは、サウルの代わりに「主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の君主に任命しておられる」とまで告げる。

[15]「サムエルは立って、ギルガルからベニヤミンのギブアへ上って行った。サウルが彼とともにいた兵を数えると、おおよそ六百人であった」

三千人いた兵は六百人まで激減していた。もはや勝ち目はないように思える。
[16-18]「サウルと、息子ヨナタン、および彼らといた兵は、ベニヤミンのゲバにとどまっていた。一方ペリシテ人はミクマスに陣を敷いていた。ペリシテ人

の陣営から、三つの組に分かれて略奪隊が出て来た。一つの組はオフラの道を進んでシュアルの地に向かい、一つの組はベテ・ホロンの道を進み、一つの組は荒野の方、ツェボイムの谷を見下ろす国境の道を進んだ」
　いよいよペリシテ人の方から攻撃を開始した。「略奪隊」…国を荒らし、物品を略奪するために派遣された兵士の一軍。ゲバとミクマスとの間は 10 キロメートル程の距離であったと思われる。ミクマスの方が北である。「オフラ」…ベテルの北東約 7 キロメートル「シュアルの地」…場所不明「ベテ・ホロン」…エルサレムの北西 19 キロメートルの地にある町
「ツェボイムの谷」…エルサレムの北東にあったと思われる。ペリシテ軍は南下して、三方からゲバにいるイスラエル人を攻撃しようとした。
[19-22]「さて、イスラエルの地には、どこにも鍛冶屋を見つけることができなかった。ヘブル人が剣や槍を作るといけない、とペリシテ人が言っていたからであった。イスラエルはみな、鋤や、鍬、斧、鎌を研ぐために、ペリシテ人のところへ下って行っていた。鎌や、鍬、三又の矛、斧、突き棒を直すのに、料金は一ピムであった。戦いの日に、サウルやヨナタンと一緒にいた兵のうちだれの手にも、剣や槍はなかった。ただサウルと息子ヨナタンだけが持っていた」
　「一ピム」は三分の二シェケル。一シェケルは 11.4 グラム。それゆえ一ピムは 7.6 グラムとなり、これは銀での支払いであっただろう。→9：8
　ここはその当時のイスラエルの状況説明であるが、なかなか理解しにくい。以前にアンモン人と戦い、打ち破った時にはイスラエル人は鉄製の武器を持っていなかったのだろうか。→11 章　仮にそうであったとしてもアンモン人の持っていた剣や槍を分捕れたはずである。またサムエルの生きている間、主の手がペリシテ人の上にのしかかり、イスラエルの領土に入って来なかったはずである。→7：13　イスラエルの地にはどこにも鍛冶屋を見つけることができなかったのは、彼らが鉄製の武器を作るといけないから禁じ、農機具を直すためには料金を払ったというのであれば、実質的にすでにペリシテ人はイスラエルを支配していたことになる。そしてなぜサウルとヨナタンだけが剣や槍を持っていたのか。彼らだけアンモン人から分捕ったのか。あるいは先祖代々彼らの家に伝わる物であったのか。
これらは今後のさらなる研究を待たなければならないだろう。
[23]「ペリシテ人の先陣はミクマスの渡りに出た」
　ペリシテ人の軍勢は強大であり、サウルの率いるイスラエル軍は少数であり、勝敗はすでに決まっているようなものであった。しかし、イスラエルには全能の主なる神がついておられることを忘れてはならない。少数であっても主が働いてくださる時に、勝利が与えられることを私たちは知っておかなければならない。→士師記 7：7 ギデオンの例。